



(旧和商)

和商同窓会会報



(新和商)

(発行所) 和歌山市砂山南3丁目3-94 県立和歌山商業高校内 Ⅲ36-6456 発行人 村垣龍男 (第11号) 昭和57年3月1日 (月曜日)

会館建設に情熱を

懐旧の情を温める場



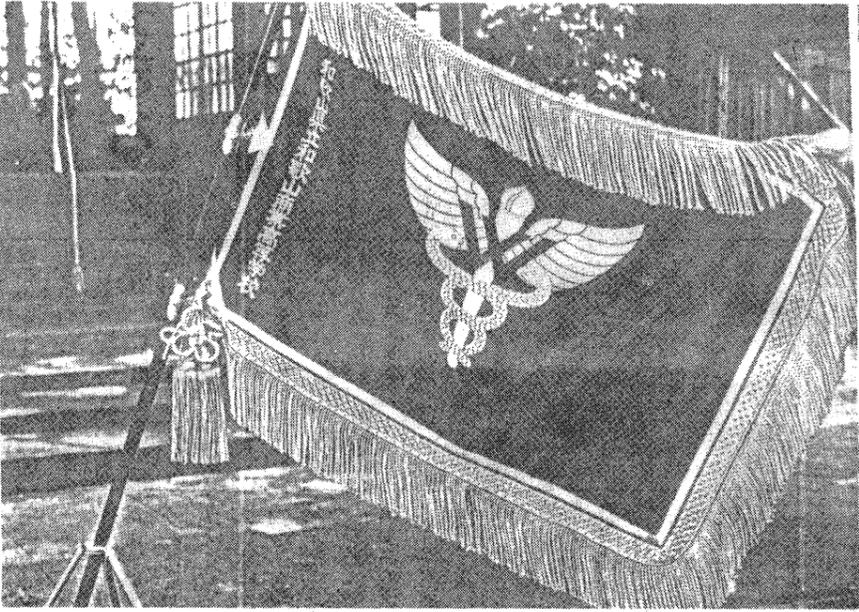
相談役 野田 聖太郎

同窓会会館 建設に想う

母校和商は明治三十七年に一〇〇名の生徒で開校して七十八年の今、二万人に達しようとする同窓生を容れる他に比を見ない大世帯に成長したのである。一流の商業高校に成長したわが和商は校運の隆昌とともに永遠に続くであろうこの輝かしい母校は心の故郷という言葉で現わしても、学窓を離れた同窓生達の懐旧の情を温めあうにたる寄り所がほしいとのせつなる願いを語り合つてすでに久しい。懐しい学舎といつても、

九番丁の県立徳義中学校の仮校舎(明治三十七年)旧女子高等小学校的仮校舎(明治四〇年)東坂上町の旧男子高等小学校的。現、雄湊小学校(明治四二年)海草郡関戸、現、西浜二丁目の星林高等学校(大正十五年)戦後(昭和二年)の廃校の悲運(昭和二六年)復活現在砂山南三丁目の校舎へと実に五転六転と苦難の変転を重ねて来た。母校の恩師方も目まぐるしい移り変わりを続けている。私が小学生の頃は徳義社の前に住んでいたのだから隣りの女子高等小学校も旧市役所もよく覚えているし、私は坂上町の校舎に通った。その頃は一年生は九十数名人学させていたのは大正七年である。その頃の同窓生は今三十数名はまだご健在

で毎年の同窓会には十数名は参加して懐しい昔話に花を咲かせたり、各人の趣味や長年の研究や体験談を聴かせてもらっているのが無上の楽しみである。それでも毎年のように一人減り二人欠けて、寂しい黙祷を捧げるようになった。然し年は流れ年代も異なるが、今は今三十数名はまだご健在



念願の校旗新調なる

「紫紺の旗の樹つとところ 使命の途をたゆみなく」と旧制校歌にもうたわれた校旗は終戦と共になくなり新制高校発足の年に作られた「校旗」兼「生徒会旗」が三十年その役目をつとめました。この間入学式、卒業式はもとより甲子園や大阪府立体育館へも生徒達と遠征したものでしたが、昨年逝去された故内藤俊彦初代校長(新制)の遺志として学校へ寄贈された金一封のお志を生かし校旗が新調されました。

重厚な「こはく織」の紫紺の地に金糸で縫取りされたマキユリーの紋章が際立つて浮かぶ見事な新校旗です。県和商のシンボルとして永く母校に伝わってゆくことでしょう。

望んでいるのが同窓生の本望に思っている、お寺やお宮が本堂や本殿を建てたり屋根を修築する計画は何年か後であっても瓦一枚の浄財の寄進を永年かかってでもしてもらってついに立派な寺や宮を建立しては、実は七十周年の記念事業の

中には同窓会館建設委員会を設けて発足して早くも十年になろうとしている。故嶋忠一理事長、故中村常夫理事長、故岡田修二理事長が急逝されて委員会のメンバーも更新されて現在村垣龍男理事長のもとで実に数十回に及ぶ会合、計画、交渉を繰り返され練りに練って下さっておるがまだその機は熟さない。もつとも種々障害もあるやに伺っているが急ぐ必要はないと思

時は移り人は去り、経済情勢の変転により、あせる心はいななくても、大多数の同窓生が望んでいるものを望んでいる所に例え小さくとも温かく造りあげたものである。学校にも移り代りがあったように、学校の先生方もも移動は年ごとに行われていた。在職中に考えていたことを転動し、退職してからもいつまでも考えていられるものでない。結核は同窓会の会員が考えて実行しなければならぬのである。同窓生は永遠の生命を持ち続けるものであり、また持つべきである。同窓会館は寄って集ってお茶をの

あれだけ全生涯を県和商の教育にそそぎ同窓会の将来を想い会館建設の基礎を築いて下さって他界された故内藤俊彦先生の遺志にも添いたいものである。同窓生の皆さんお互に情熱を会館建設に傾けようではありませんか。

第一の時期はわたくし論議が激突し、この「異動」と「勤評」が先生方と相対的な影響を与え、学校運営にも一つの転機がきたようでした。おんぼろ校舎での大任が果たせるかどうかあや

若き日の思い出に 次々と姿を消し新しい鉄筋校舎と入れ替わっていつまで続いたと思います。その間、数度の台風に見舞われ、時には瓦が木の葉のように吹き飛ばされ、の発意で教室から始められ、本館の改築は最後にまわされました。昭和三十三年より改築の槌音がひびきはじめ、同年の十一月南鉄筋三階建二十一教室(建坪六五二坪四、五〇〇万円)が建ち、第二棟が先ずわたしたち仲間から姿を消した危険校舎となり果てて

司会「わたくしはもちいたのです。わたくしは先輩が築いた建設当時の頼りといき伝承を守り育ててゆきたいと思います。最後に現在のわたくしに何か助言をお願いします。」

同窓会所有地 紀の国会館 県営駐車場

新制和商の生いたち 母校教諭 蔵垣新之介記

大正デモクラシーに生まれ 昭和ロマンに生きる

副理事長

速水 常興 (旧33期)



過ぎ去ったものへの追憶

旧33期生会が卒業四十周年を記念して懐しの関戸原頭矢の宮神社に集合し、慰霊祭を執行し、そのあと旧の校舎(現、星林高校)を訪れ、その昔、青春を謳歌した校庭に佇み、ある者は樹木に頬を触れ、隣接せん許りに地面に伏し、往時を懐古しお互に還暦近しとは言え、若かりし良き時代を思い出して時の経過も惜しいほど懐しく楽しんだものほんこの間のように思われます。

事からみると、我々の年代が昭和の時代に最もよく学び、最も忠実に戦争に従事し、また敗戦後の日本の復興に如何に懸命に働いてきたかをつくづくと考えさせられます。

「大正デモクラシーに生まれ、昭和ロマンに生きた」といえば美しい言葉であり、それなりのそこはかない甘いムードが漂いますが、なかなかどうして軍靴の音、銃剣のひびき、私達の生れた育った時代は自分というものの意識すら持つことの許されない、無情な時代であった。ただそのなかにあって、たまゆらの儼安を貪るように求めること。それが全く背のやまであつたように思えます。

今迄に私達の経験した六十年間の前半二十年は、学校と戦争でありました。後半の三十年は敗戦故国の零かなかの復興とガムシヤラな日常の生活でした。これから

はいよいよ人生の第三期を生きていくことになり。五十年の春秋を、学窓に懐しく思い出すが、過ぎし若人の心を、応援歌に托して、この歌声の絶えざる限り、青春は身体によみがえり、理想は胸中に永劫の炬と燃ゆる酒壺満々、酔、我にあり歌わん哉、我が永遠の生命の讃歌を。

私はこの催しに参加して、もう六十路に近く既に白髪も混じるようになったこの頃、久し振りに、実に久し振りに青春の血の沸きかえるのを覚えました。

「地に咲き燃ゆる」を始めとする応援歌の数々、私達は肩を組み、腕を振って歌い続けました。しかもそれらを通して感じたことは、

純情と正義感に溢れた若者であつたあの頃の心でした。ところが世の中へ出ると、どこか世の中へ出ると、私には厳しい練習の連続でした。来る日も来る日も道場に叩きつけられ……時に立っ事ができない程に。日曜日の練習は勿論、照りつける太陽のもと紀三井寺の階段でのハード・トレーニング、ひと息いれる間もなく道場に駆足で帰る。乱取稽古と一日の練習に凍てつくような夏期合宿。早朝からの寒稽古、何時も先生は先頭に立って汗を流していらした。その汗には勝つ事への執念のみに燃え尽しているように思えた。

また私は決して切り離される事のない師弟の絆の大切さを知りました。

ここで新制和商柔道、三十年を振り返る時、先生は、母校の柔道部々長を努められる事十五年。大変自分自身に厳しく他人に教える事はまず自ら実行し、絶対に妥協を許さない人柄で常に説かれた和商柔道の精神こそが幾多の県大会制覇、全国大会三年連続出場等名門校といわれるまでに母校を導いてくれた事と思えます。先生と音楽を共にした百人近いOB諸兄が母校を訪れる時、必ずや道衣姿の先生を懐く思い出されるのではないのでしょうか。また練習の合間に先生を囲んで合唱した部歌も岩に激する奔流か淀に沈む静けさか

（一面よりのつぎ）
昭和三十五年二月には、商業実践教室(今の被服教室)、格技教室が建ち、同年四月には東鉄筋三階九教室(建坪二七六坪一七〇〇万円)が落成し、第四棟が解体され、昭和三十七年七月には生徒待望のプールが完成、昭和三十九年十一月に鉄筋四階建本館(建坪一、一六〇坪一億一、八〇〇万円)が完成し、第一棟が姿を消してゆきました。昭和四十二年十二月には講堂(建坪六四五坪七、〇〇〇万円)ができたが、近代学校としての姿が見事に完成され、最早役目を終った第五棟が解体され、わたくしたち仲間から去ってゆきました。

師厳にして 然る後に道尊し

常任理事

内芝 順一 (新8期)



我が師と柔道

私は時々母校を訪れると、何時も思い出すのは、汗に塗れて練習した柔道、そして全精魂を傾けて指導して頂いた恩師、田中貞夫先生(現、星林高校々長)の事である。

私が入学したのは昭和三十一年……すぐに柔道部にお世話になった時、当時部

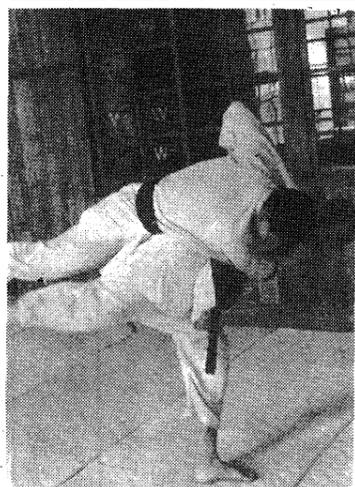
なる事を忘るべからず。我が和商でも柔道の修業で自己の精神と肉体をたたく不倒不屈の根性を作らん事を希望すると共に部員は外柔内剛、人間の道探究に心を研ぎ、諸先輩の残した伝統を汚さず、過去の教訓を忘れぬこと。高校生の本分としての勉学と運動即ち文武の双道にある事を決して忘れてはならない。」と

道場もなく旧兵舎の一部を改造した、今から思えば粗末なものでした。その道場で毎日自ら柔道衣をつけ部員達を指導する先生の気魄その眼光の鋭さは、今でも私の脳裡から離れない。また道場の正面の額に書かれていた「道場で泣くなら外で泣け」という言葉も。この時が先生と私の最初の

れ、私自身も挫折しかけた時が幾度かありました。そのたびに私を支えてくれたのは和商柔道の精神といへば「根性」の二字だった。即ち、先生と諸先輩が一步と築かれてきた伝統の力だったと思えます。

「攻苦喚を食う」こと三年、全国大会県予選、二年間苦汁を飲まされた桐蔭高を下し優勝した瞬間、先生は唯ひと言「よくやった」と私達の手を握りしめ、日は涙で潤んでおりました。

最後に田中先生のご多幸を祈ると共にいつの日か連れ立って母校の全国大会での健闘を応援に行きたいと思いつつペンを置きます。



「ここにいこえ」と「ここにいこえ」と

（次号へつづく）

